

特集

看護過程 再考

1980年代以降、日本でも多くの看護理論家、臨床家が、看護を科学的に基礎づけるものとして、「看護過程」の考え方を発展、普及させてきました。実際、「看護過程」が看護実践の向上に果たしてきた役割は非常に大きいといえるでしょう。

同時に、看護基礎教育においても、多くの看護師養成校でカリキュラムに「看護過程」が設けられ、演習、実習も、看護過程をベースに実施され、大きな労力、時間が割かれている現状があります。

このような状況を受け、「看護過程」という思考の方法の教育が、看護教育の目的となってしまうという声も多く聞かれます。これは、「看護過程」を基礎教育に用いることのメリット／デメリットが十分に議論されないまま、形式的に導入されてしまった側面があるといえるのではないのでしょうか。今特集では、「看護過程」が基礎教育で重要視されてきた背景と問題点をもう一度整理し、基礎教育での「看護過程」の役割を再考するとともに、近年米国で「看護過程」に代わるものとして活用され始めた臨床判断モデルを紹介したいと思います。